

IS学園のカウンセラー ルームにて

アリルシン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

IS学園にはカウンセラールームが存在している。

そこにいるのは副業を持つ二十代の男だった。

目次

更識	楯無さんの悩み	1
織斑	千冬の悩み	8
更識	簪さんの悩み	15

更識 楯無さんの悩み

現在、春休み。

全寮制であるこの学園だが、在学している殆どの生徒は里帰りをする

しかしここに残っている生徒もいるので、カウンセラー室は毎日開けていた。

とは言え来客は少ない。

いつものことだ。

そもそもこのカウンセラー室は校舎や学生寮とは離れた位置に設けられている。

故にここに来る者は少ないのだ。

だが、常連が毎日のように来るので暇ではなかった。

「失礼します」

入って来たのは三つ編みメガネっ子の真面目そうな少女である。

名前は布仏 虚。

三年生で生徒会役員だ。

彼女はよくここに来る。

しかし来客は来客であるが、彼女は悩みを相談しに来たわけではない。

「すみませんがお嬢様……生徒会長がここに来ていませんか？」
「来てませんよ」

そう答えると虚さんはハアッと溜息をついた。

ここに来る彼女はいつもが決まって今のよう質問する。

「苦労しますね」

「ええ……どうすればいいでしょうか？」

「小型のGPSを体内にこっそり埋め込めばいいのでは？」

「成るほど。確かにその手なら……」

冗談のつもりなのだが本気にさせてしまったようだ。

だが、それだけでその人には手を焼かされているのが解る。

「それでは失礼しました」

虚さんが出て行った後、数秒後に天井を見上げた。

「そろそろ降りてきたらどうですか？」

僕の言葉に反応し、隠れていた逃走犯は姿を表した。

その光景はまるで忍者。

だがその例えは的を射抜いている。

「やっぱり気がついていたのね」

「当然ですよ……一応、副業絡みで気配察知くらいは基本中の基本ですから」
青い髪に赤い瞳の美少女。

彼女こそが先程虚さんが探していた生徒会長こと更識 楯無である。

「ジューズ、貰うわよ」

「言う前に冷蔵庫を開けないでください」

楯無さんは冷蔵庫から勝手にオレンジジューズを取り出して飲む。

その姿はまるで自分の部屋にいるかのようだった。

「逃げ出すのはいいですが、結局問題を先送りしているだけじゃないんですか？ そう言うのはあまりよくありませんよ？」

「ちよつとした息抜きよ」

「早めに終わらせてゆつくりするほうがいいと思います。鬼ごっこしている時間が持たないでしょ？ それにこんなに遠くまで逃げなくてもいいでしょ？」

「あら、貴方は美少女が来なくなってもいいのかしら？」

「問題ありません。ってなわけで早速通報します」

携帯で虚さんに伝えようとしたが、その前に楯無さんに携帯電話を奪われる。

いつものことだ。

しかし、いつもと違うのは表情だった。

「もう少し話に付き合って」

彼女は悩みを相談に来た客だった。

と言うか彼女は常連である。

決まって内容は同じ。

「妹さんの話ですわね？」

楯無さんは黙りながらコクリと頷く。

彼女は妹である更識 簪と仲が悪くなっていた。

簪さんに対して言った言葉が原因らしい。

「先程も言った通り、問題を先送りしているよりも早めに蹴りをつけたほうがいいんですよ？」

「解ってる……けど、簪ちゃんは私を避けるようになったし……だったらこのまま……」

このような家庭内の相談は対処に困る。

何せ部外者が口を出しているレベルを軽く超えているからだ。

「貴女の家庭の事情は知っています。はつきり言って遠ざけた方が将来的にも良い判断と言えます。しかし、今の貴女の態度ではどちらにしても変わらない」

僕は冷蔵庫から缶コーヒーを出して飲み始めた。

時に意味はない。

ただ喉が渴いただけのことだ

「いいですか？もし仮に簪さんと要人のどちらか一方しか助けられないとしたらどうしますか？」

「そ、それは……両方助けるわ」

「無理ですね。迷いなく答えられなければどちらも助かりません」

空になった缶をゴミ箱に入れ、僕は彼女の顔を見ながら真剣な眼差しで話を続けた。

「先代はともかく先々代は非道な方と聞いています。例え親兄弟を犠牲にしても任務を全うする覚悟を持っていたとか……貴女にその覚悟はありますか？」

「……無いわ。だつて簪ちゃんを失いたくないなもの」

「なら楯無の名を返上することを勧めます」

更識家もこれで終わりかな？

まあ同じような人が多くいるから困らないちゃ困らないだろう。

「それから一つ言っておきますが、簪さんは貴女の事を避けているならなんでこの学園に入学したんですか？」

簪さんは今年から嫌っているはずの姉と同じ学び舎に入学する。

それは以前に楯無さんから聞いた話だ。

「確か日本の代表候補生らしいですね。わざわざ候補生になって嫌いな姉のいる学校に

入るなんて、まるで姉を超えたいとか見返してやるとか思っているんでしょかね？
そしてその先の……」

「見つけましたよ、お嬢様」

秘密裏に呼んでいた虚さんが迎えに来た。

タイミングは悪いが、この相談はこれで終わりだ。

「ちよつと待つて！そ、その先のつてなに？」

「それは自分で考えて下さい。あ、ちなみに明日から副業で世界旅行に行つてきます。

お土産をお楽しみに」

「そんなことより続きを！」

「こちらの続きが先ですから」

楯無さんは虚さんに連れられて去つていく。

するとカウンセラールームは静かになった。

「やれやれ、妹や弟を持つ姉つてのはどうもブラコンやシスコンが多いみたいですね

……」

とある知人二人を連想する。

まあ僕も仮に妹がいたらそうなっていたかもね。

「さて、更識家の分まで頑張りますかね」

僕は世界旅行という名の裏稼業の支度に取り掛かった。

その日、楯無は名を返上して元の名である刀奈に戻る。

こうなることは予想していた楯無……刀奈の父はこうボヤいたそうだ。

「彼が養子に來れば安泰なのにな……」
と

織斑 千冬の悩み

世界旅行を終えて帰って来た翌日が入学式。

ハードスケジュールだが問題はない。

入学式には出ないし、僕のことやこのカウンセラールームのことは特に通達されていないのだ。

故に男がこの学園にもう一人いることはごく一部の人間しか知らず、ひっそりと静かな日々を過ごさせるのであった。

「……刀奈さんは名を返上したんですね」

「ええ、破門覚悟だったのにあっさりと受け入れられちゃった」

刀奈に戻った生徒会長さんの表情は前回と比べて明るく見えていた。

気のせいではないはずだ。

「それで？ 簪さんとは仲直りしたんですか？」

「まだよ。でもいつかはする」

「早めにできることを祈ります」

話が終わり、刀奈さんはカウンセラールームから出て行った。

しばらく間を開けてる、次なる来客がやって来る。

「失礼するぞ」

「失礼ですお引き取りください」

「……酷くないか？」

「冗談ですよ」

黒いスーツを着たツリ目の美女教師。

彼女の名前は織斑 千冬……またの名をちーちゃんだ。

「お疲れのようですね」

「ああ、疲れた。というこで付き合え」

手にはお酒の入ったビニール袋。

ここは神聖な学び舎だよね？

と以前問いかけたことがある。

その際、彼女はバレなきや犯罪じゃないなどと言った。

いいのかそれで？

なんて思いつつお酒のつまみを用意し、酒盛りが始まるのであった。

「弟さんが何かしでかしましたか？」

「な、何故わかるの？」

「貴女の話って殆ど彼の話ですから」

「気が付かなかった」

ブラコンは自覚なしのようだ。

「で、何したんです?」

「イギリス代表候補生と決闘騒ぎになった」

それを聞いた瞬間、僕はクスクスと笑う。

「元気があつて実にいいですね」

「笑い事ではない。それもあいつは相手の実力も把握できていないんだぞ?」

若さと勢いとビギナーズラックって言ったところから。

それで勝てるよう相手ではない。

「しかもあいつは参考書を読まずに捨てたんだ」

「あんなら、それ授業中ちんぷんかんぷんだったでしょ?」

「ああ。全くわからずと言う顔だった」

ある意味で不良だな。

「しかも私のことを千冬姉と呼ぶ」

「いいじゃないですか」

「よくない。私は教師だぞ?」

飲むペースが早いな。

つまりそれだけ悩んでいるということか、

「一夏くんにここで教師をしていることは伝えてあったんですか？」

「いや……」

「ならしやうがないですよ。それに他の生徒で千冬様となお姉様呼ばわりされているんですよ？ だったら実の弟さんが千冬姉つて言うくらい多めに見ましようよ」

「うむ……だがな」

悩むちーちゃん。

呼び方に関してはここまでにする。

彼女の方針を強制的に変えるのはよくないからだ。

「ところでイギリス代表候補生の子とどうして決闘なんかになったのかな？」

「それは……」

僕はちーちゃんから経緯を聞いた。

イギリス代表候補生の子……名前をセシリア・オルコットというらしい。

その子の暴走が原因だった。

一夏くんも言い返したのは不味い。

だが何よりダメなのは……

「ちーちゃんか止めなかったのが一番悪いと思う」

「う、うむ……」

言い返さずに黙ってお酒を飲む。

だが明らかにアレは空だった。

凶星ということだろう。

「それで？一夏くんにISの事を教えないの？」

「エコ贖はしない。あいつか言ってくれば別だがな」

絶対に言わんだろうな。

姉に迷惑掛けたくないとか考えているはずだから。

「……そもそも私はこうなる事を恐れてわざとISに関わらせまいと遠ざけてたのにアイツは……」

「いやいや、元凶は他にいるでしょ？」

僕はちーちゃん呼ばわりした最初の人物をイメージした。

「まあ、身内だから厳しくするのはそれこそエコ贖だからあまりおすすしめしないよ」

「じゃあどうすればいいんだ？」

「それぐらい自分で考えなさい」

僕はコップに入ったビールを飲み干した。

すると、ちーちゃんがいきなり咳払いをする。

「は、話は変わるんだがな……今度の休みは暇か？」

「ごめん。副業で今月は無理」

「そうか……大変だな」

「まあこれも世のため人のためだよ……最も僕は自分を正義の味方とか思っていないけど」

「私はお前をヒーローだと思っているがな。一滴も血を流さずに悪を滅ぼすところが特にそう思わせる」

なんかちーちゃんに褒められると照れるな。

「さて、今日のところはこれで終わるか」

「そうだな……また来るよ」

「いつでもどうぞ。あ、一夏くんにも何かあつたら来るように伝えておいてよ。話し相手くらいなら出来るからさ」

「そうさせてもらう」

ちーちゃんは寮へと帰って行った。

後片付けをしているとふっと昔の事を思い出す。

それはまだI Sが兵器となる前の、ちーちちゃんと天災と僕の青春時代の日々だった。

更識 簪さんの悩み

土曜日。

第二整備室に一人の少女が作業している。

彼女の名前は更識 簪。

生徒会長である更識 刀奈の妹である。

「……これじゃダメだ」

簪の専用機は未完成だった。

その理由は織斑 一夏に人員を持っていかれたからである。

彼女は一夏を恨んだ。

しかしそれを表沙汰にはせず、一人で黙々と作業している。

「……今日は帰ってアニメでも見よう」

失敗の連続だった。

だが彼女は決して諦めない。

姉を超えたい。

それが彼女を突き動かしていた。

「にゃ〜」

寮へ変える途中、白い猫が現れる。
そして自身の足に擦り寄ってきた。

「かわいい」

頭を撫でようとした簪だったが猫は逃げていく。

しかし、数メートル離れたところで立ち止まって彼女の方を向いた。
まるでついて来てと言っているかのように。

「……」

彼女はついて行く事にした。

しばらく歩くと一軒のプレハブ小屋にたどり着く。

「こんなところあったんだ」

簪はそう口にした。

すると、プレハブ小屋に一人の男が出てきた。

誰かの気配を感じ、僕は外に出る。

そこにはメガネを掛けた青い髪の少女がいた。

「こんにちわ」

「ご……ごんにちわ」

怖がつてるみたいだ。

まあ見しらに男がいれば怯えるのも無理はない。

「僕はこのカウンセセラールームの人です。一応立場は教師ですね」

「……更識 簪……です」

うん、知っている。

お姉さんにそっくりだもん。

それに……

「あ、あの……どこかでお会いしたことありますか？」

「さあ？ 覚えはないよ」

嘘である。

実は何度も会っていた。

だが当日は変装していたし、覚えが無くても不思議ではない。

「折角ですから立ち寄ってください。美味しいクッキーと紅茶を出しますよ？」

「あ、いえ……私は……」

断るとした瞬間、簪さんのお腹の音が鳴り響く。

彼女は顔を真っ赤にしていた。

「無理にとはい言いませんよ……どうしますか？」

「いい、頂きます」

素直でよろしい。

と言う訳で簪さんを招くことに成功しました。

「……あれ？誰かいたんですか？」

紅茶の入ったカップが二つテーブルに置かれていることに対して疑問に思ったのだらう。

彼女の質問にコクリつと頷いて答えた。

「ええ……どうやら帰ってしまっただようです」

実はまだいるんですが、面白いんでこのまま何も言わない事にしましょう。

「さて、改めまして。ここはカウンセラールームです。お悩み相談室とも言いますし、一部分の方の憩いの間としても使われています」

「は、はあ……」

いきなりだったかな？

まあ相談ある？と聞くよりかはマシだ。

「ちなみにさっきの猫は悩みある者を導き招き猫なんですよ」

「え？」

嘘じゃない。

これは本当である。

あの猫はたばちゃんと言うのだが、あの子はいつも悩みを抱えている人を連れてくる。

刀奈さんとその学園で出会ったのもこの子が連れてきたからだ。

「何か悩みがあるのなら聞きますよ。勿論、無理にとは言いませんが」

簪さんが何に悩んでいるのかは理解できる。

しかしここはあくまでも彼女とは初対面で何も知らないフリをした。

「……私は……」

ぼつりぼつりと話してくれた。

彼女の専用機であるISは開発している企業が一夏くんの専用機の為に未完成のままと言う。

そして自身はその機体を完成させようと必死に努力しているがうまく行かないらしい。

「誰かに手伝って貰うとかダメなんですか？」

「……ダメ……これは私がやらないといけないことだから」

そう決めている理由はだいたい理解できた。

「僕はＩＳについてはよく知りません。けどＩＳは企業や国家が膨大な資金と時間を費やして開発しているはずですよ。一人でできるようなものなんでしょうか？」

「お姉ちゃん……一人で開発しました」

「お姉さんがいるんですね？」

「はい……この生徒会長でロシアの代表です」

うん、知っている。

「そうですか……それは本当に一人で成し遂げたことなのでしょうか？」

僕は紅茶を一口飲み、そして再び口を開けた。

「お姉さんからそれは直接聞かれたのですか？」

「い、いえ」

「では話を聞いてみた方がいいと思いますよ」

さて、ここからが本題だろう。

簪さんの表情から察したように僕はこう質問した。

「お姉さんと喧嘩でもしましたか？」

「え？」

「顔に書いてありましたから」

驚いた簪さんだったが僕の言葉に怪しまず納得したようだ。

そして、しばらく沈黙後に話してくれた。

「お姉ちゃんにこう言われました……貴女は何もしないでいい」と

「なるほど」

何もしないでいい。

流石に妹を可愛いから、守りたいからで言ってもそれが伝わるはずも無い。

ただ彼女を傷つけ苦しむだけの言葉だ。

（言葉は刃物……師匠がよく言っていたっけ）

かつて色々と仕込んでくれた師匠の言葉を思い出しつつ、簪さんにこう言った。

「その言葉の真意って考えたことがありますか？」

「真意……ですか？」

「ええ。僕には単に貴女を傷つける言葉とは思えないんですよ……まるで何かから必死

に守ろうとしている気がします」

「……だからわざと……」

どうやら真意に気づいたようだ。

そして、そろそろ隠れている人には現れて欲しんだけど……こちらから誘わないと無

理そうですかね。

「さて、真意に気がついた簪さんに一つ質問します。お姉さんと仲直りがしたいですか

？」

「……したいです。でも、お姉ちゃんは私を避けてるから」

「大丈夫ですよ……だってそこにますから」

「え？」

振り返った先にはダンスがある。

刀奈さんはあの中に隠れていた。

「折角ですのでここで仲直りしてくださいね。でないと今後出禁にしますから」

そう言って僕は外に出た。

邪魔者は退散した方が話しやすいだろうと考えたからである。

出て行った後、刀奈はダンスから出る。

そして、妹である簪の方へ顔を向けた。

何を言えればいいか分からず、そして簪もどう言えればいいか分からないでいた。

唐突すぎるのである。

「……は、ハロー？げ、元気ですか？」

と片言になる刀奈。

簪はそれを見て思わず笑ってしまった。

「うう……いきなりすぎるわよ」

元凶を恨み。

しかし、きつと彼ならこう答えるだろう。

「元凶は貴女自信です」

と。

「えつと……ごめんなさい。私の言葉がずっと貴女を苦しめて」

「……ううん。私こそごめんなさい。お姉ちゃんの気持ちを考えずにずっと……ごめんなさい。ごめんなさい」

ポツリポツリと簪の目に涙が出る。

そんな彼女を刀奈は優しく抱きしめた。

氷は溶けて水となる。

二人の遅すぎる春が到来した。

過ぎた時間は戻らない。

しかし、この先の時間は過去よりもきつといいものになるだろう。

「任務完了」

ドア越しにいた男はそう呟いて何処かへと消え去ったのであった。